

〔松屋筆記 八十四〕天保七年霖雨及飢饉 天保七丙申年三月十九日壬寅より雨降出て廿九日までの間快晴僅に四日なり、其外は降ざれば曇り、或は朝降て晴れ、日中降て夕に止などして四月に成ぬ、四月朔日より八月十五日までの間おなじさまにて、快晴十日にみたず、去年乙未の冬より、今年の春三月にいたるまでに、地震幾十度ふりけん、一日夜に三四度、又は五度もふりし事ありき、七月十八日朝より雨降出、東南の風おこれるが、巳の時よりいたくはげしく成て、面をむくべきやうもなし、略 中 八月朔日はた北風雨はげしく、十八日の風につげり、同月十三日夜も烈風雨也、十六日又南風雨いとあらましく、朔日の風につげり、七月十八日第一、八月朔日第二、十六日第三、十三日第四と順次せる大風雨なり、かくて葛西領金町の堤きれて、江戸川あふれ流れ、二万石の地水底になれる事卅日に過ぎ、水戸通路たえたること十餘日なり、武藏の見沼邊は、七月十八日以後、八月廿三日までも水た、へて、舟筏かよはず、江戸町賣の白米、錢百文に五合なりしが、八月初より四合五勺、同十八日より四合、廿一日より三合五勺なり、此時搗大麥、百文に四合、割麥六合也、小豆一升の價錢百六拾四文、水油一合、調五十文、鹽一升六拾八文、大根いとちひさきを拾本つかねたるが百三十二文、大なるは百七十二文にも及べり、茄子はたえてなし、熟瓜冬瓜白瓜など、すべて瓜類ふつになし、西瓜の大き梨子の太なるほどなるがま、見ゆめり、味噌金壹兩に十八貫目、さつま芋百文に六百目、里芋壹升六拾四文、その外高價ならざるものはなし、魚類たえてなし、實に古今未曾有の凶歳也

おほやけより命ありて、裏店住の町人男子に白米二升五合、錢四百二十四文、老幼婦女の類は白米壹升五合、錢貳百四十八文、たまはりき、江戸中すべて三拾貳万二千人餘にて、米五千石餘、錢拾三万貳千貫許といへり、裏店住にても下女下男弟子などあるものにはたまはらず、表住の者は下女下男弟子などのなき、工商にても賜事なし